

PBL 型学習を基盤としたキャリア教育と 21 世紀型スキルの育成

山本 昌平（大阪市立新巽中学校）

概要：「調べ、まとめ、発信する」情報活用能力の育成のために、また、合意形成力やコミュニケーション力、多様性受容といった非認知的能力の育成のために総合的な学習の時間を基盤として PBL 型学習を実践した。「しんたつ、みらいプロジェクト」と題し、「職業の魅力ってなんだろう？」という問いから仕事について探究し、未来の働き方や、必要な力、持続可能な社会の開発の取り組みについて学び、目的意識と他者意識を持って発信を行った。本研究では、年間を通じて行った生徒たちの学習実践の流れと、学びを支える ICT 機器の活用事例、実践が生徒にどのような変容をもたらしたのかについて報告し、一つのカリキュラムモデルとして提案する。

キーワード：情報活用能力，PBL 型学習，21 世紀スキル，SDGs

1 はじめに

世界は今、グローバル化と情報通信技術の発達により、多様な文化や価値観が距離という垣根を越えて飛び交っている。また超高齢化の波も押し寄せ、そう遠くない未来に Society5.0 の生活を求めなければ、社会・経済・環境のバランスを保つことができない時代が到来するだろう。さらに、紛争や差別、宗教や貧困の問題、食品ロスや環境問題、ジェンダー、マイノリティ、エネルギー、災害問題といった様々な課題も解決し、持続可能な社会を形成することも求められている。行き先不透明な未来を切り開く「解決」と「創造」の力を持った次世代の担い手を育成することが学校に課せられた使命であると言えるだろう。ゆえに、学校はより多くの情報や変化を受容しながら、学校本来の目的である「未来の社会で活躍できる人材の育成」に焦点をあて、一斉画一的で形骸化した学習形態からの脱却を図ることに向き合わなければならない。

そのような局面を迎えているにも関わらず、学校は依然、前年度踏襲を繰り返し、過去の成功体験から導かれる学習方法や指導方法にばかり着目してはいないだろうか。経験則にのみ価値づけし、根拠を明確にすることや言語化する

といった改善を進めてきただろうか。前述したとおり、子供たちが生きていく未来に必要な力は、我々大人が経験した過去だけで教授できるものではない。

とすれば、学校の当たり前や常識を疑い、行なっている教育活動が時代に左右されない普遍的なものなのか、それとも目的を見失った慣例的なものなのかを見極めながら、答えのない時代で逞しく生きるための力の育成について、整理していくことが必要だと考えたのである。

今回、初めて1年間を通じてプロジェクト型学習の実践を行った。生徒も教師も戸惑う面が多くあったものの、一斉画一的な学習でない「協働的な学び」につながったと感じている。また、教師も生徒たちを導くために「コーチング」、「ティーチング」、「カウンセリング」の視点にわけ、ファシリテーションを行なった。本校はタテ持ち型編成と複数担任制を敷いており、これによって教師は協働せざるを得ない環境の中に身を置いている。新しい変化に対応する学校にするためには、今、教師たちも協働的に働く仕組みの中に身を置き、自己研鑽をし、集団として磨きあうことが必要だと考えている。働き方改革やブラック学校といった課題も多いが、一枚岩となり、社会の「未来」と「今」を感じることに

ができる学校づくりを、生徒、保護者、地域、企業、教員、委員会とパートナーシップを大切にしながら創りあげたいと考えている。これからの時代を背負う生徒のため、ひいては彼らを育てるこれからの教員のために価値ある実践としたい。

2 研究の方法

(1) 調査対象および調査時期

- ・大阪市立新箕中学校 2 年生 73 名
- ・平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月
- ・調査対象の学年は、1 年生の時にも地域の魅力探究型の PBL 型学習実践を行なっている。

(2) 実施カリキュラム

情報活用能力や 21 世紀スキルの育成として<表 1>の計画に基づき、実施した。

<表 1> 2 年 PBL 型学習 年間計画

プロローグ：「しんたつ、みらいプロジェクトの開幕」
第 1 節：「びゅーてい大使の次なる使命、仕事の魅力は？」
第 2 節：「なかなか会うことのできない企業の話聞こう」
第 3 節：「自分がなりたい仕事について考えよう①」
第 4 節：「実際に体験しに行こう」 * 職場体験
第 5 節：「感謝の気持ちと学んだ成果を送ろう」
第 6 節：「仕事のびゅーていを『むーびい』で伝えよう」
第 7 節：「自分がなりたい仕事について考えよう②」
第 8 節：「大阪万博誘致の結果を知ろう」
第 9 節：「実際に訪問しよう」 * 企業訪問
第 10 節：「プレゼンを完成させよう」
第 11 節「プレ・プレ」 * 学年発表会
第 12 節：「なりたい仕事とその未来」 * 研究発表会
エピローグ：「活動を通じて学んだこと」

(3) 分析方法

<表 2>のようなコンピテンシーを評価基準として設定した。協働的な場面や学習が進んでいく中で 21 世紀スキルの中でもどんな力が育まれているかを明確にするためである。これを生徒、教師双方向にとって共通のものさしとし

て活用し、このような視点で PBL 型学習、教科の授業を実践した。

<表 2>

内発的動機	取り組んでみようとする意識の源
自己管理能力	自身の感情や行動をコントロールする力
自己有用感	自分の価値を知り、自信に変える
持続的探究	粘り強く、追求める芯の強さ
問題解決力	道筋を立てて、物事に取り組む力
批判的思考	物事を冷静に見つめ、判断する考え
社会的責任	集団の中で自分が出来る振る舞いや貢献
合意形成力	納得しながら気持ちをすり合わせる力
多樣的受容	考えや価値観等の違いを受け入れる広さ
情報活用力	情報を選び、活かし、正しく発信する力

3 実践の内容と結果

<表 1>に記載したカリキュラムの中で、特記すべき取り組みに焦点を当て、その活動の流れを示す。

① 福井大学義務教育学校 round table (6 月)

探究を進めるものの、なかなかうまくいかない時期があった。福井大学義務教育学校の 2 年生も



「職業」をテーマに【図 1】意見交流の様子探究をしていたので、【図 1】のように FaceTime で交流を持つことにした。学び方や探究方法、インタビューの方法など、自分たちだけでは気付くことのできなかつた学びを得ることができた。

② 職場体験学習後の学習報告会 (7 月)

23 の事業所で職場体験を実施した。文化発表会で仕事の魅力を発信するというミッションを持って体験した。



【図 2】情報共有の様子

似た業種で6つのチームを編成し、【図2】のようにポスターセッション形式で全体の情報共有を行った。個別で体験した縦の学びが横につながった。

③ 全員での合意形成（10月）

文化発表会での発表内容を6つのチームに分けて運営していたが、一週間前になってもうまくまとまらなかった。3人の生徒【図3】合意形成を図る様子がこれまでのストーリーを一新して再提案した。



【図3】のように全員で対案を確認し、合意形成を図った。

④ 他者意識を持った発信（11月）

職場体験でお世話になった方々に、体験を通じて学んだ仕事の今や魅力を発信すると約束をしていた。【図4】の【図4】文化発表会の様子のように AI やドローンといったテクノロジーが今後自分たちの働き方をどう変えるのか、また、いつの時代になっても変わらない人とのつながりなど、学んだことをまとめ、発信した。



⑤ 企業訪問（1月）

仕事の魅力を探究していく中で、生徒たちは SDGs に出会うことになった。そこで【図5】の【図5】企業訪問の様子のように SDGs に取り組む大阪市の企業に訪問し、どのように世界に貢献しているのかを学びにいった。読売新聞、クボタ、住友製薬など17の企業に訪問した。よき社会のロールモデルと出会うことができた。



⑥ #しんたつばんぱく（2月）

「100 人のリスナーに SDGs を発信する」を目的に大阪万博とかけた学習発表会を実施した。



【図6】のようにブ【図6】研究発表の様子レゼンや、アート・アクティビティ・モニュメントなど計14ブースに分かれて発信を行った。来校者約50名と在校生・PTA約70名に対して発信することができた。1年・3年も含め、学校全体で発信した。

4 結果

年間を通じた協働的な活動の中で「みんな違っていい」の多様性を受容する視点を育むことや、「だからこそ対立は起こるものだ」と理解し受け入れた上で、人との関わりの中で起こる感情の起伏をコントロールする力を育むことができた。＜表3＞に示すように、自己有用感や多様性受容、達成感などに通じるアンケート項目をが1年間で飛躍的に向上した。

＜表3＞

生徒アンケート結果		2 年	
項 目		H 2 9	H 3 0
1	学校へ行くのが楽しい	58.3	70.8
2	体育大会や文化発表会などの学校行事に取り組んでいる	60.6	84.7
3	授業や先生の話で将来の進路や生き方について考えたことがある	45.1	59.7
4	先生はICT機器などを使って、授業内容や方法を工夫している	74.3	81.9
5	人権の大切さについて学ぶ機会が多い	56.9	68.1
6	授業で自分の考えをまとめたり、発表したりすることがある	51.4	63.9
7	友だちの気持ちを考え、友だちを大切にしている	79.2	91.7

5 考察

実践を進める中で「勉強できる生徒の意見の方が正しい」という風潮の中で進むことも予想していた。受験の仕組みから、学校における優秀であることのものさしとして、ペーパーテストの結果が重視される風潮が学校には未だ存在するからである。しかしながらこの実践における議論では、一般的に学習能力の高い生徒の意見が全体の合意とならず、気持ちをすり合わせる活動ではむしろ、それらの意見が取り入れられないが多かった。その中で、プロジェク

トを牽引した生徒の多くは、「人は簡単に自分の思う通りに動いてはくれない」や、「自分の意見は当たり前ではない」という価値観が生まれ、自分の感情と向き合いながら合意形成を図る方法を体験的に学習した。一方、反論する生徒たちも自身の意見の中に「なぜ違うと思うのか」を明確に伝えることの大切さに気づくことができた。対案なき反論はただの文句であることを学んだからである。伝え方や言葉、情報のやり取りの中に、生徒同士でありながらも尊敬の念を持ち、共通の課題意識の中で協働したからこそその結果であると考ええる。

6 結論

PBL 型の学習実践は多くの非認知的スキルや 21 世紀型スキルの向上に効果的であるといえる。その理由を以下に 4 つ挙げる。

- ①対話を通じて問題解決を図る学習過程で、多様性受容や合意形成、達成感を得ることができるから
- ②PBL 型の学習実践を推進する上で、自己管理能力やスケジュール調整、行事との調整、さらには時間割などの調整力が必要となるから
- ③有限である時間の中で課題解決を図ることや、成し遂げたい合意形成を図るには、資料作成力や、プレゼンテーションスキルが必須となるから
- ④時間内に効果的な表現で物事を円滑に進めるためには、年齢に関係なく ICT 機器の活用能力が必要であるから

これらの点で総括すると、大人になっても経験として残る汎用的なスキルを育成することができるのが PBL 型学習の良さであり、実践する意義であるといえる。ICT 機器やアプリも多数利用したが、それらも目的を達成するための手段に過ぎなかった。アナログとデジタルを他者とコミュニケーションを図るための手段として目的に応じて選択する力もまた、これからの未来を創る子どもたちに備わってほしいスキルである。

7 今後の課題

全生徒、全教員で協働的な学習の授業実践を推進することができた。しかしながら以下のような課題も生まれてきた。

- ・ PBL 型の学習を初めて全体で実施したため、時間の調整や生徒たちの進度が予測できず、放課後の時間や朝の時間を圧迫することとなった。
- ・ 生徒たちの学ぶ意欲を継続させることの難しさがあった。実際、働く魅力とは何だろうと問いかけるだけで、1 年間継続して学習することはできない。そこには、集会時での報告や、終学活でそれぞれの代表者が報告をするといった小報告会を実施することや、自分たちを対象にした情報共有会（7 月）や思考ツールを用いた情報共有会が必要（10 月）であった。学びを継続する仕組みと仕掛けを全教職員で共有することが必要である。

上記の点を踏まえ、全体のカリキュラム・マネジメントの実践や、教科横断的な学びも推進する必要性を感じた。これからの教育現場に必要なのは時間とアイデア、そしてより良いものを自ら創る学校としてのチャレンジ力である。どの学校でもチャレンジしてみようと思うことができる実践とするために、今回出てきた課題も協働し、解決していきたい。

参考文献

- ・ 国立大学法人福井大学教育学部附属義務教育学校平成 (2018)『自律的な学びへのイノベーション探究するコミュニティを培う』(2-15)
- ・ 工藤勇一 (2018)『学校の「当たり前」をやめた』時事通信社